

2016年度自由研究期間 研究成果概要

所属・職・氏名： 国際学部・教授・杉山直人

研究課題：有島武郎作『迷路』を考察する

研究期間：2016年9月23日～2017年3月31日

研究成果概要（2,000字程度）

『迷路』（1918）を中心にして有島の背教について考えることが本研究期間中の課題だった。かならずしも高い評価を受けた作品ではない。小説としての仕上がりが荒削りなせいだろう。たしかにディテールを積みあげて人物像に厚みを加えた『或る女』などと比べると、『迷路』は背景説明に乏しい。物語後半におけるプロット展開にあって中核的な役割を果たす、P夫人の「懐妊」をめぐる彼女とAとのかかわりなどは、肉体関係ができるまでの過程が数行ですまされているために唐突で不自然である。

だが『迷路』が、キリスト教をめぐる有島の「思想遍歴」について理解を深めてくれることは確かだろう。作家の背教宣言は『迷路』が出版された翌年にあたる一九一九年『リビングストーン傳』第四版序言（以下「序文」）で明らかにされた。その前年に『迷路』は出版されているわけで、キリスト教にたいする有島の懐疑が作品に色濃くにじみ出ている。『迷路』を読み解くさいの一義的アプローチである。

主人公青年「A」にとってキリスト教はかつて人生の要石だった。信仰こそ自分を取り巻く外界に秩序を与え、外界が自分とどのような関係にあり、外界のなかで自分をどう位置づけるか、自己存在の基盤だったのである。物語がはじまる時点で、そのすべてを「A」は否定している。だから物語が進行しても、Aはそれまでの自己のあり方を否定する言葉を続けるしかない。ではキリスト教のなかにAは躓いたのか。かならずしも明快に語られているわけでもないが、ひとつのポイントはピューリタニズムとそれがもたらす「道德」への罪悪感と反発であろう。

キューカーたちとの付き合いのなかでAは性をめぐる厳しいタブーにであう。「シェークスピアを読むことが飲酒に次ぐ悪徳だった」とある人物はAに語っている。A自身も健全な男としての自らの性欲を素直に受け入れられず葛藤しているからことを考慮すると、彼らはA自身を映し出す鏡として設定されていることになる。

ピューリタニズムでもうひとつあげるなら、峻厳な勤労観とそれへの反発である。患者への良心的すぎる対応によって疲労困憊、あげく鬱病に苦しむ「P医科大学の秀才」だった精神科医スコットや、「一分一秒も無駄にしまい」と「顔を真っ赤に汗ばませながら、せつせと働く」ドイツ人ミューラーが好例である。ふたりはともに自殺している。

このように『迷路』が描き出すピューリタニズムの偏った価値観とそれへの反発が、作家の背教を説明するための有力な手がかりとなることはあろう。ただし『迷路』をめぐる論考は、現時点では未完のまま置かれている。筆を進めれば進めるほど『リビングストーン傳』であればほど烈しく語られる有島の信仰と、二〇年後『迷路』で示される「背教」の落差にたじろぐからである。背教宣言後、作家として自立したのちは自我の充実を作品で繰り返し説くことになる

有島は、にもかかわらず、やはりキリスト教的な価値を作品のなかで奏でる。『迷路』はもともと、『白樺』に発表された「首途」(1916)と『新小説』に掲載された「暁闇」(1918)とが連結されて『有島武郎著作集』に収録された経緯がある。ところが『迷路』が発表されたのと同じ年、キリスト教的隣人愛を母に先立たれた子供たちに説く「小さき者へ」が『新潮』一月号を飾っている。「互いに愛しあいなさい」というイエスのメッセージを童話のかたちで凝縮した「一房の蒲萄」が発表されたのは最晩年にちかひ一九二二年、波多野秋子と縊死する前年だった。

こうしてみると、いっぽうでキリスト教を否定しておきながら、その同時期に聖書的価値が底流を流れる作品とがきびすを接して発表されているのがわかる。『迷路』をとりあげて作家の背教について執筆しながら、作家が真の意味でキリスト教に背を向けたのかどうか、あらためて疑問を感じる自分を発見することになってしまった。

そこで作家の処女作であり信仰告白の書である『リビングストン傳』(1901)に注目している。有島二三歳、札幌農学校からの卒業を控え札幌独立教会に入信する直前だった。青春時代に燃えさかった信仰の記念碑たる自伝を、二〇年後に「序文」のなかでふり返った作家は「心にもない大言壮語を放つてゐる」ことを恥じるという。自らの信仰を信じ切った自分が真面目に筆をとったことについて、「今にして私は自分の軽卒に呆れ返る。」とまで言う。

これほどまでの自己卑下を引き出すことになった自伝は、批判の矛先を有島の考える日本社会と教会のあり方に向けている。だから『迷路』や『迷路』の延長線上に執筆されている代表作『惜しみなく愛は奪う』を考えると、自伝の再検証はおおいに役立つ。

日本では忘れ去られた感の深いデービッド・リビングストン(1813~1873)だが、欧米、特に母国イギリスでは現在も人びとの尊敬を集めているようで、最近の数十年だけでも十冊程度は自伝や関連著作が見つかる。『リビングストン傳』を有島と森本厚吉が出版したのは一九〇一年だった。一二〇年後、この探検家についても現在では研究が進み、かつてのような偶像的な扱いを受けているわけではない。人間デービット・リビングストンを描いたという2013年にイェール大学から出版された *Livingstone: Revised and Expanded Edition* (2013) を合わせ読むことで、作家背教のうしろになにが潜んでいるのか、自伝を『迷路』とからませて研究を進めてゆきたい。

なお研究期間中に、遠藤周作について論考を発表している。有島とは対照的に、西洋渡来にして背広のキリスト教を和服の基督教に仕立て直すことに成功した現代作家だからである。

研究成果概要は、データで research@kwansei.ac.jp まで提出してください。